
触手モノ

密林系紳士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

触手モノ

【Nコード】

N4130X

【作者名】

密林系紳士

【あらすじ】

気がついたら異世界。でも主人公は旅立ちません。だって触手だから。様々な陰謀や魔法、力が渦巻く異世界。でも主人公は関わりません。だって触手だから。見たことも無いような不思議な人や物が溢れた異世界。でも主人公は彼等に避けられます。だって触手だから。これは、触手に転生したアレな主人公の、日常をつづっただけの物語。

1話 転生しました

☆一日目

絶望には底が無いって聞いたことがあるけど、どうなんだろう、この状況。

何年か前に魔法使いにクラスチェンジしたときのショックのレベルじゃねえぞ、コレ。

ため息をついて、薄暗い洞窟の中で立ち上がる。

視界が高くなったから、多分立ち上がったはず・・・なんだけど、あんま自信が無い。

それは何故か？

「うわッ！モンスターだ！」

ああ、いいタイミングでなんか金髪のヒトが。そうです、私がモンスターです。

とか言ってる場合じゃないな。落ち着け落ち着け。

「phんじえあqjh」ぱj@おえhじえあ！」

うえ？

なんぞコレ？耳とか目は今までどうりだったから、勇気をもって数年ぶりに他人に話かけてみたのに、出てきたのは奇妙なうなり声。

これじゃ、威嚇されてるとしか………、あ、さっきのヒトが逃げていく。

ですよー。

腕の一本を持ち上げ、頭をかこうとするが、そもそも自分の頭が何処にあるのかも判らない。

ため息をつく、と、洞窟から出て行くのは諦めた。

元々他人と話すのは苦手だし、話しかけても逃げられるんじゃ、精神的ダメージが溜まるだけだ。

それに、適度に湿った洞窟は案外居心地がいい。腹が減ったら壁の表面に生えているコケを食べれば、すぐに満腹になった。人間だったときなら、確実に出来なかった食事だが、不思議と忌避感はない。精神が肉体に引っ張られているのだろうか。

一心地つくと、またため息が出た。

皆さんは転生という事象をご存知だろうか。死んだ人間がそれまでとは別な生き物として再びこの世に生まれるというアレである。

ご他聞にもれず、俺も転生者だ。

でもさあ。

普通、それって漫画とかアニメとかの主人公じゃね？

いや、せめて人間じゃね？

元は仏教の用語？らしいし、ありえないわけじゃないんだろうけど、何よコレ。

そう考えて腕を全部持ち上げる。

1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10。それ以上は数えるのが馬鹿馬鹿しくなってくるような腕、腕、腕。表面に吸盤がくっついてるようなのもあれば、ナメクジみたいにツルツルしてるのもある。中にはちよっと公衆の面前では表現しづらい、とても卑猥な形状のものですらある。先っちょに、縦に割れ目があるやつとかも。総じて脊椎動物のような骨の周囲を筋肉が覆っているような質感ではなく、あえて言うなら、象の鼻に近いものがある。

多種多様さは種の保存のためには自然なことかもしれないが、それを一人分の身体で実現するなと思う。

っていうか、触手だ。

象に例えたけど。無理。無理だから。腕として俺が動かしてるそれ。

触手とは思えない。

エロ方面では中々ご活躍のアレである。ファンタジー系の陵辱要素ありのエロゲだったら登場率8割を超えるんじゃないだろうか。俺もそれなりに好きだったりする。言うまでも無いが、エロ要員である。

勿論、好きって言うても使われてるのを第三者として眺める側での話しだけど。自分が使われる側なんて誰得だし、自分がなったりする側なんてありえないし。

・・・話がそれた。

ともかく、死んだはずの俺は、気がいたらこの薄暗い洞窟内にいて、何故か触手になっている。

WHY?

生前、あまり触手に縁の無い生活を送っていたのに・・・、とか考えても、誰だってそうだろうし。

もしかしたら、今まで俺が見たことのある蛸とか烏賊みたいな触手を持った生き物も転生した人間だったんだろうか？

ま、いいか。

というか、煩わしい集団生活を送る必要が無いと考えれば、中々いいかも。早々に考えることを放棄した。自分の身体に対する嫌悪感なんて考えるだけ無駄無駄。

寝よう。

とりあえず、俺の触手生活はそうやって幕を開けた。

☆2日目

半日ほど壁を這っているカタツムリっぽい虫を見ていたのだが、昼過ぎに小さな熊が洞窟に入ってきた。

どうやらじっと虫を観察していたせいで俺に気付かなかったようだ。

っていうか、なんで虫をそんな集中して観察してたんだろう、俺。暇だったからいいんだけど。

60cmくらいの小さな熊はそのそと俺の間近まで近寄ってくる、鼻を鳴らして周囲を警戒し始める。洞窟内は結構深く、そのときは気付かなかったが、俺がいた場所はほぼ暗闇の場所だったらしい。

やがて、臭いを追った熊が俺の触手の一本を銜え、あれ？と思った俺が振り返ろうとした瞬間、思いつきり噛み付くと、俺はその痛み

に悲鳴をあげた。

「ぴgんじゃphじえrがぼいhじえrごqじゃえr！」

内心では痛ッ！くらいのつもりだったが、その声は予想外に野太く、しかも洞窟内だからか、やたらと反響して聞こえた。

思わず立ち上がった俺はだいたい2メートル以上。

視線があつた熊は割りと可愛い外見をしていたが、その目には明らかな恐怖が浮かぶ。

驚いた熊は悲鳴をあげながら洞窟から走り去っていった。

いきなり攻撃された上、一目で逃げられたことで少し怒りも湧いたが、じゅるじゅると音をたててうねる触手を見ると、まああの反応も判らなくも無いか、と嘆息する。

誰だって暗い洞窟でいきなり奇声をあげて触手が襲い掛かってきたら、逃げるだろうし。

噛み付かれた触手も、数秒後には緑色の血？が停まり、傷も消えた。

痛みも無いので、さらにどうでもよくなってくる。

結局、その日は丸一日虫がコケを食べる姿を観察して終わった。

暇すぎだろ、俺。

☆3日目

暇すぎるので、洞窟の中を探索してみた。すると、入り口から百メートルくらい奥で行き止まりになってることが判った。だからどうってわけじゃないんだけど、そこには数本のつるはしと、一輪車？みたいなのがあった。

もしかして、ここ、鉱山か何かなんだろうか？ つるはしも一輪車も、木でできている部分は腐食していないから、捨てられてからそう時間は経っていないみたいだ。

首（そんなものがあれば、だが）を傾げながら、つるはしを持ってみるとかなり軽い。

金属部分がけっこう大きいから、持ち上がるか心配だったが、もしかしたら軽い金属で出来てるのかもしれないな。

ふむ。

暇なんだから、鉋夫ごっこでもしてみるか。虫の観察も少し飽きてきたし。

なんとなく、そう考えてつるはしを振り上げ、壁に叩きつけると、当たった部分の壁が崩れ落ち、つるはしがへし折れた。

あつるえー？

折れたつるはしを見るが、その部分だけが朽ちていたわけじゃなさそうだ。

・・・ということは、今の俺の触手はけっこう馬鹿力だということだろうか。

試しに、もう一回、今度は加減してつるはしを振り下ろす。

土の壁はざくざくと削られていく。

なんだか面白いくらいに土が削られるので、これを次の暇潰しにす

ることにした。

どうでもいいけど、一日中暇つぶしって転生しても生活習慣が変わらないのか、俺は・・・。

半日ほど掘り進めると、なんだか硬い岩にぶち当たった。

壊してもいいんだが、そうするとつるはしを一本駄目にしないといけなくなりそうだったので、岩を掘り起こすことにする。岩に沿うように穴を掘っていくと、きらきらとした鉱石と一体になった岩が出てきた。

うーっん、なんぞコレ？

宝石？なのかな。大きさはだいたい直径1メートルくらいのでこぼこした球形で、俺の触手ならなんとか持ち上げられる程度の重さだ。

表面から見える鉱石は無色透明。ダイヤモンド？ないない。素人がテキトーに掘っただけで出てくるわけないもん。

だったらこれは何だ？いや、俺知らねえし。

・・・ま、いっか。しばらく考えてもよく判らなかつたので、面倒くさくなって途中、掘っておいた小部屋に転がしておく。

その後も掘り進めると、同じようなものが2つ出てきた。やっぱり判らんから小部屋に転がす。

そうしてビフォーアフターすると、洞窟の広さが数倍以上になってきたし、時間も経ったので今日は止めることにした。

さすがに少し疲れたので、今日はもう寝よう。

☆4日目

今日も今日とて鉱夫ごっこ。

掘り進んでいくと、今日も岩が出てくる。やっぱり無色透明の鉱石が埋まっていたが、もはや流れるように小部屋へ。

判らないことは後で考えるに限る。

そうして、掘って掘って掘って掘って、とうとう最後には外まで貫

通させた。

なんということでしょう。

入り口から行き止まりまで100メートルの、シンプルだった洞窟が、山の中を完全に貫通して入り口が二つに。内部のお部屋は7つ。4世帯の家族も納得の広々としたリビングです。

・・・ってやりすぎか。

とりあえず、貫通させた方の入り口から外を見るが、見渡す限り森だけで民家らしきものは無い。

ま、今の俺がそんなところに行っても相手にされないどころか、下手をしなくても殺されるだろう。

太陽の光の下で改めて見る俺の触手は、相変わらず表面がヌラヌラとした粘液で覆われていて、（性的な意味で）攻撃的だったり、（性的な意味で）威圧的な形状をしてたりするからなあ。

ともかく、今日は洞窟を貫通させたことで満足した。これ以上穴を掘り進めると崩落したりするかもしれないから、鉋夫ごっこは卒業かな。

うゝん、でも明日から何をして暇つぶししようか？

・・・とりあえず寝てから考えよう。

☆5日目

今日は昨日と一昨日掘り起こした鉱石を見てみることにした。

とは言っても鉱石なんか判らんし、どうしたモンかなゝ。

あ、そうだ。

鉱石を覆ってる石を砕いていったらどうだろう？

余計なモノが無くなれば、多少は判り易いかも。

そう考えて、鉱夫体験一日目で壊したつるはしを持ってくる。

全力でやると鉱石も一緒に碎けるので、慎重に、慎重に石の部分だ

けを取り除いていく。

これは中々の暇つぶしになりそうだ。

・・・一個を完全に鉱石だけにするまで、だいたい2時間くらいかかったか。

多少歪だが、出来上がったのは元の岩の半分くらいの鉱石の塊だった。

出来上がってもよく判らんけど、これって水晶ってやつかなあ。

うーん。とりあえず他の岩も試してみるか。

2個目。3個目。4個目。5個目。6個目。7個目。8個目。9個目。

・・・全部同じだった。段々コツが判ってきて、最後の一個は1時間以内に削り終えたが、それでもやっぱり出てきたのは同じ水晶らしき？ 鉱石だった。

たしか、水晶ってここは、石英が多く含まれる鉱山なんだろうか？

触手で腕組みしながら考えてみるが、やっぱりよく判らない。

価値があるかどうかよく判らないのでどうするか迷ったが、とりあえず小部屋に仕舞っておくことにした。俺じゃ、使い道ないし。

とりあえず今日はもう寝よう。

☆6日目

重大なことに気付いた。

俺、魔法が使えるみたいだ。

それに気付いたのは今朝のことだった。

目を覚まして、朝食のコケを食べてから外でラジオ体操をしていると、妙に日光がキツくなってきたから、光をさえぎるものが欲しいなあ、と思ったのだった。

そのままなら、後で木の葉とか枝で日傘を作ればいいんだが、その

ときはとりあえずなにか欲しい、と思ったただけだった。

次の瞬間。俺が立っている地面から、黒い光が出てきたと思うと、それは俺の身体に纏わりついて光をさえぎるヴェールみたいに全身を覆う膜になった。

それと同時に、それまで感じていた日光にたいする鬱陶しさが消えていた。

唐突なことで思考が停止していたが、我に返ると、俺は叫んでいた。

嬉しかったからかもしれないし、もしかしたら、単純に驚いたせいかもしれない。

ただ、確実なのは、その声を聞きつけて俺を見に来ていたヒトが、腰を抜かしたまま逃げていったことだった。危なそうだったから助けてあげたかったが、生憎若い女の人だったから、俺が近寄るわけにもいかない。

だって俺が近寄るだけで一枚画のシーンが始まりそうだもの。回想モードで何回でも見れちゃうよ。

あっはっは。そんな気がなくても陵辱ゲーのイベントにしか見えな

いキャラかー。

死にたくなってきたよーな。

・・・あまり考えないようにしよう。

それはともかく、魔法だ、魔法。

日傘魔法以外に何か使えないかと思って、色々試してみると、とりあえず火を出すことが出来るらしいことが判った。

ふむ・・・。火か。

この魔法は洞窟の近くにあった岩を簡単に溶かせるくらいは温度が高いらしいが、使い方によっては自分も危ないので、洞窟での使用は控えることにしよう。

夕方、付近の木を数本折ってきて適当に積んでキャンプファイヤーをしてみたが、煙が酷くて目が痛くなってきただけだった。

やっぱ乾燥させないと駄目か。

でも、洞窟の中は結構湿ってるしなあ。

あ、そうだ。明日は、薪用の小屋を作ることになろう。ついでに魔法の練習もしてみようか。

予定も決まったので、今日はもう寝よう。

1話 転生しました(後書き)

なんだか衝動で書きました。
続く・・・んでしょうか？

2話 触手生活始めました

☆7日目

小屋を作るための材料を取りに言っている途中、俺は重要なことに気付いた。

・・・そういえば、俺は小屋なんか作ったことないんだよね。

子供の頃からやたらと動物に嫌われる質^{たち}だったから、犬を飼って小屋を作ることも無かったし。

そんな根本的なことに気付いたのは、森に材料を取りに来た後の話である。

うーくん、地震とかあったら怖いけど、そこで寝泊りするわけじゃないから、壊れてもいいつくりにしてみようか？それなら、そう難しくないだろうし。

そう考えて森に行き、木を切ることにした。

とはいえ、丁度良^{のこぎり}い鋸や斧^{おの}なんかあるはずもない。

それじゃ、どうするのかって？

ふふふ。俺の触手には、色々な奴があつてね……。何に使うためかは言わないが、表面がやたらとイボイボしたのとか、なんか注射器みたいな針の先から変な液体を噴出すのとか。

一生使う予定は無いが、やたらとバリエーションに富んでるんだ・・・。

コイツもその中の一本なんだが、俺がその触手に力を入めると、案の定、触手の先端にある金属のような光沢の円錐形がギュイイイイイイイイインッ！と音を立てながら回転し始める。

フツ・・・、あえて命名するなら、それはドリル触手ッ！

男の欲望と浪漫が合体した、スペシャル器官！

こんな、素晴らしいモノが、俺の身体にあるなんて・・・。

しかもすごく・・・大きいです。

うつとりとしながらその触手を木の幹にあて、ズブズブと押し入れていくと、すぐに幹をくりぬかれた木は倒れた。

・・・凄い威力だ。こいつをくらって無事な女・・・じゃなくて木はないだろう。

十数本の木を倒すと、それを引きずって洞窟まで戻る。

倒したときと同じ要領で木の邪魔な部分を落とすと、上手くドリルを使って木を材木に成形していく。

思った以上に簡単に材料が出来たので、次にそれを組み立てていく。俺の触手は人間よりかなり力が強いが、なにせ一人でやっているので時間がかかる。それでも、夕方にはちょっとしたログハウスもどきが完成していた。

触手が活躍できる場はエロだけじゃないんだ！

昨今の触手Ⅱエロの風潮に、俺は新たな風を吹かせてみせる！

そう思っていた時期が俺にもありました。

勢いをつけてふりあげた手が、俺の意思とは無関係にうねってなんだか白濁色の液体を噴出した瞬間、その熱も冷める。

その触手から噴出した液体は奇妙なほど粘りが強く、でろりと吹き出た穴から垂れ下がっている。

どう見ても○液ですありがとうございました。

謎の液体を噴出しても、何も感じなかったが、しかし確実に何かを無くしたような気もする。不思議なことだ。

ただ、その液体を地面に掘った穴に始末しているときは、無性に人間だったときと同じ感覚を得ていたのは事実だ。あの、わけも無い虚しさとかやつちまった感とか、脱力とかはかなり酷似していると言えるだろう。

・・・さて。明日のために、今日はもう寝よう。なんだか無性に疲れた。

☆8日目

朝、目を覚ますと、相変わらす洞窟内のコケを食べ、その次にラジオ体操を始める。

一人だけで自分でリズムをとりながらする体操は少々恥ずかしいが、雄大な自然を前にしながらやると爽快だ！第一、誰も見てないから恥ずかしがる必要も無いしね！

そういえば、そろそろコケにも飽きてきたところだ。

毎日俺が食べるせいで、生育面積が減ってきているような気がするし、今日は自分が何を食べられるのか調べてみよう！

あと、寂しいからなんかペットとか欲しいかも。

殺したりするのはカンベンだけど、家畜になるならこの先色々と助かるし。

そう思いつくと、触手を駆使して森の中を移動し始める。

・・・2時間経ったが、何も見つからない。

このあたりは動物が少ないのか？河岸^{かし}をかえるべきか迷ったが、あまり遠くまで行くと、洞窟の場所が判らなくなってしまうから、断念。

ま、もう少し捜してみよう。

てかどうでもいいけど、この触手、滅茶苦茶素早いな。

今も歩くスピードで動かしてるつもりなんだけど、多分時速60kmくらいでてるんじゃない？

下手に人間にぶつかったらひき殺しそうだ。気をつけないと。

そうして捜し始めて早4時間。

くくく。見つけたぞ。やっと見つけた。

草むらを挟んでだいたい10メートル先。

なんか草を食べてる、白いモコモコの生き物がいた。

見た目は羊っぽい・・・かな？でも、羊よりは首が長そうだし、なんか長い角も生えてる。

草を食べてるってことは、多分、草食獣だろう。

見た目も大人しそうだから、どうにか捕まえてみたいが・・・。

あ、そうだ。

フェイスハガー先輩みたく、問答無用で飛び掛って捕まえれば・・・。

妙案も浮かんだところで、レッツトライ。

触手を使って音も無く地面を蹴ると、それを傘の骨のように広げながら、羊（仮）に飛び掛る。

多分、DMC4のエキドナみたいな感じなんだろうけど、触手の数が圧倒的に多い分、より悪夢的な絵面になっているだろう。

自分の身体に影がさしたことで羊（仮）がこちらを見上げようとするが、遅い。遅いわあ！

蛸が魚にそうするように、触手全部を使ってグワシッ！とキャッチ。

羊（仮）は暴れるが、俺がびくともしないため、数分で大人しくなった。

ふはははは！ 暴れれば暴れるほど俺の触手は絞まる！ 貴様は捕まった時点で負けていたのさあ！

そう考えてほとんど触手で身体が埋まった羊（仮）を見ると、そこにいたのは口から泡を吐いて他界寸前の草食獣である。

やりすぎたーッ！

慌てて触手を離すと、どうにか呼吸を整える羊（仮）。

・・・よかった。いきなり動物を殺したとか、トラウマレベルの思ひ出がまた増えるところだった。

それから、どうにか触手を首につないだまま洞窟に戻り、途中で取ってきた蔓を使って簡単な紐を編むと、それで杭に繋いでおく。洞窟の近くは草も多いから、困ることもないだろう。

とはいえ、運動不足は良くないし、でも毎日放牧してそれについて

いくのも面倒くさい。

・・・明日にでも、柵さくを作ろうか。

害獣が寄ってこないから、一石二鳥だし。

あ、今日朝以外何も食べてねえや。・・・ま、いつか。腹も減っていないし。

とりあえず、今日はもう寝よう。面倒くさいことは明日の俺に任せて、今は寝たい。

☆9日目

いつまでも羊（仮）では可哀想なので、名前をつけることにした。

とりあえず雄雄しく生きるという意味で羊漢ヨウカンでいいだろう。・・・雌メだけだ。

とりあえず午前中、切り出してきた木で羊漢ヨウカンの柵を作り、放牧してから森を探索しに出かけた。

この森は色々と実をつける木が多いみたいだが、正直、見たことも無いものばっかなので迷っている。

今、俺の触手が持っているのは、紫色のりんごっぽい果物と、紅いバナナみたいの、それからエメラルドブルーの洋ナシ風の何かである。

どれも果てしなく怪しい……。

毒とかあるんじゃない？と思いつくと少々気後れしてしまうが、しかし食べ物が無いと困る。今日も結局コケを食べているのだ。

ええい、男は度胸！なんでも試してみるのさ！

三つ同時に、触手の先に開いた口で飲み込んでいく。

……。

あれ？普通に美味いぞ？

てか見た目通りの味なんだが。色が違うくらいで、中身は同じなの

か？

でも、なんでこんな類似があるんだろ？

・・・うーん、判んね。

ま、いつか。

とりあえず何個かの実をもうで帰ることにした。中心に種もあるみたいだから、洞窟の近くに植えてみよう。うまく植樹できれば、態々家から離れる必要も無くなる。

自分、基本的にインドア派ツスから！

今更な設定を思い出して誰にともなく言ってみる。・・・返答は無かった。

洞窟に帰ると、羊漢は相変わらず草を食べていた。

なんとなく和む。

でも、何故か俺の姿を見ると少し逃げる。

第一印象が悪かったかなあ、と思いながら羊漢を紐で繋ぎ、洞窟に戻る。

明日は魔法の練習でもしてみよう。

☆10日目

空を飛びました☆

☆11日目

色々なことがありすぎたので、順を追って説明しようと思う。

まず、昨日の朝のこと。俺は食事を果物に変えたせいか、体調が今までになく良好だった。

やっぱり、できるだけ洞窟の近くにこの果物の木が欲しい。

食べた後の種は洞窟から少し離れた場所に植え、その周りに肥料を

巻く。早く大きくなれよーっと思いつながら水をまいて、
またしても魔法が発動した。

え？どんな魔法だって？

ジャックと豆の木とかを想像してもらえば、判りやすいです。

雲に突き刺さるほど高くはないのが救いか。それでも樹齡が判らな
いくらい背が高い。

さらに3本の木が捻れるようにして育っていて、一本に融合してい
るのだが、それがまた太い。

間違いなく実がなってた木よりも高い。

なんておませさんな0歳児だ！・・・いや、意味判んねえよ。自分
で自分が。

うーっん、どうも俺の魔法って、無意識の部分がかなり大きく関わ
ってきてるみたいだ。

だからどうってこともないんだけど。所詮^{しよせん}、にわか触手の考えであ

る。もっともらしいことを言っても、その意味までは考えてないんです！

すくすくと育った木には、いくつもの実がなっていた。

若干テンションがおかしくなっていた俺は、これは行くしかないでしょう！と思いいつと、触手を使ってすると木を昇っていく。

フッ。木登りⅡ落ちるは前世までの話よ。今なら「W R Y Y Y Y Y Y Y Y !」とか言いながら幹を垂直に昇っていくことも・・・、あ、発声の部分でアウトか。どこまでも片手落ちだな。

頂上近くまで上ると、途中でもいでおいた実を食べ始める。

雄大な大自然を眺めながらの食事は中々いいものだ。さつき朝食食べたばかりだけど。

今までで一番高い位置にきたお陰か、西の方に集落が見えた。

いくつかの家屋が並んだ、昔ながらの村といった感じである。

目を凝らすと、突然現れた巨大な木に驚いたのか、何人かの村人が

こつちを指差していた。

コツチミンナ。

てか、なんで10 km以上離れた位置がしっかり見えるんだろう。
いや、触手視力スゲー！とは思うけどさ。

今更だけど、随分人間離れたモンだ。便利だから別にいいんだけどさ。

さて、あんまり見られるのも嫌だから、降りようか。そう思った瞬間、いきなりドップラー効果を伴った何かが近付いてきた。

何だ？

目をそちらに向けると、青い光に覆われた流星？が割と近くを飛んでいく。

流れ星？でも青いしなあ。

薄々とは感じていたが、どうもファンタジー世界というのは不条理な気がする。便利な分には問題無いんだけど。

流れ星を見送りながらそう考えていると、後ろから突風が吹いてきた。

衝撃波？　ってやつか？　もしかして、音速超えてた？

直撃を受けても特に俺は怪我もしなかったが、俺が昇っていた木は別だ。

折れはしなかったが、大きくしなり、その勢いで果物がバラバラと落ちる。

それを見て「ああ、勿体無い。」とは思わなかった。それどころじゃなかったのだ。

木がしなったせいで俺は空中に放り出されていたから。

一瞬の浮遊感と共にアイ・キャン・フライ！

飛んでる！　飛んでるぜエ—————！　とか言ってる場合じゃねええええ！

ぎゃーッ！死ぬ！死んでしまおう！

どうにかしないと・・・！

そうだ！風を・・・、風を掴むんだ！

そう閃き、触手を開く・・・が、落下速度にはまるで変化なし。ですよねー。傘みたいに開いても、骨組みの部分しか無いんだし。

しかしここはファンタジー世界！

都合良く目覚めてくれ！俺の能力！チカラでないと俺が地面の染みになっちゃおうううう！

ピカ————ッ！

最終的に魔法に頼った俺の全身から突然あふれ出す意味不明の発光現象。

え、マジで？と思う間も無く、俺の全身は青い光に包まれた。

それと同時に意識は消失。

次に気がついたときには、なんか地面で寝てた。・・・正直、何かなんだか。

薄暗い中周囲を見回すが、見覚えのない木ばかりしか見えない。

とりあえず、生きていたのは嬉しいが、しかし、ここ何処だろ？ 時間も明け方ってことは、丸一日意識を失ってたのか？

よく見回すと、ここから見える山の向こうになんだかやたらと背の高い木が見えるから、もしかしたらあそこが洞窟のある方向かもしれない。

行ってみるべと思い、そちらに向かって高速で移動を始めた。

そういや、あの木の上からなんでこんな距離を移動してたんだろ？

自分の身体だが、意味の判らない部分が多すぎるな〜と思う。

そんな風にテンションが下がっていたせいだろうか。

鳥が集団で襲ってきました。

さっきからいきなりすぎだろ！と突っ込みたいが。しよせん所詮は畜生。

嘴でツンツンされるのはちよつと痛かったが、半分以上を捕まえて
やったわあああああッ！

どうやら鶏と同じく飛べない鳥のようなので、羊漢と同じ柵に放り
込めば飼うこともできるだろう。

タナボタだが、しかしこれほどの好機、退かぬ、媚びぬ、省みぬ！

例によって蔓を使って縛ると、触手でそれを落とさないように持ち
上げ、走る。

羊漢、今お友達を連れて帰るよおお————！

そう叫びながら俺は家路をひたすら走った。

で、今日。

なんとか洞窟まで戻ると、俺は予想外の事態にへたり込みそうになっていた。

あばばばばばば。

なんで。

なんで人がいるんだよ！

しかも、大勢！

俺が埒ねぐらにしている洞窟の前に、何人かのヒトがいたのだ。多少距離があるから判らないが、洞窟を指差しながら何かを喋っている。

まさか、家捜しするつもりか！

洞窟の中にあるのは精々が果物と数日前に掘り起こした鉱石だが、それでも勝手に入られるのは気分が良くない。

しかし、3人ものヒトの前に出るのは、正直怖い。

悪さをするわけじゃないんだし、放っておいて欲しいが、自分が触手であることを考えると最悪殺されるかもしれない。

元々コミュ能力は低い上、そもそも今は会話することも出来ないの
で、さらに絶望的だ。

でもここを追い出されたら、行く場所なんて無いし・・・、話しかけるのは怖いし・・・。木の影からじつと様子を見ていると、ふとヒトがもう一人いるのに気付いた。

他の3人と同様に、金髪の男だ。そいつは、こともあろうにウチの羊漢の紐を引っ張っている。そのまま持ってきた袋に入れるつもりみたいだ。

あ・い・つうううううう！

見知らぬ人間に対する恐怖が、怒りに上書きされる。

見てろ！見てろ！

そうだ！^{……}そうすると決めたときには、既に行動は終わっているんだ

！心の兄貴もそう言ってたし！

俺は、鳥の紐を木の枝にくくりつけると、正面から姿を現した。

「ぴg jなえj h gあ@おじえh r t！！」

それは俺の家だ！勝手に入るなッ！

内心はビビりまくっていたが、なんとか触手を振り上げ、自分を強そうにアピールする。

金髪共は最初、意味不明そうにこっちを見ていたが、俺がへっぴり腰のまま走っていくと、慌てて逃げ出した。

・・・良かった。本当に良かった。殺されなくて良かった・・・。

袋に入れられそうになっていた羊漢を出してやると、こいつはすぐに草を食べ始めた。

どうやら俺のことは眼中に無いらしい。

さっきの俺の勇姿を見てくれないとは、残念なことだ。

ともかく、俺は縛っていた鳥たちを柵の中に放牧すると、洞窟の中に戻った。既に太陽は真上に来ようとしているが、なんだか色々と疲れた。

・・・今日は寝て、明日からまた頑張ろうと思う。

3話 一人ぼっち生活続いています

☆12日目

果物の木から落ちてた実は、羊漢と鳥たちにやることにした。

俺は大丈夫だったが、正直動物が喰えるか心配だったけど、杞憂だったらしい。

今、奪い合うように全員が果物の入ったバケツに口を突っ込み、貪っている。

こうして見ると、こいつらも可愛いモンだね。

そういえば、今日はどうしようか。課題は色々あるが、どれも急ぎじゃないんだよね。

考えてると、ふと青狸映画の駄目小学生の科白が頭に浮かぶ。

人間が生きていくうえで必要なものは衣食住である、だったっけ。それは俺も変わらないだろう。

生きていく上で必要なものは衣食住。でも俺は触手だから「衣」は必要無い。「住」も洞窟があるから問題無い。だとしたら「食」か。コケから果物にグレードアップしたとはいえ、あまり偏食もよくないだろう。

とはいえどうしたモンかな。

一昨日のことで、俺の魔法に植物を一気に育てる力があつたことは知ってるけど、しかし作物を育てるための肝心の種が無い。

ここから西の集落の人間なら持つてるかもしれないけど・・・。

うーん、今更交渉なんかお互いに無理だし、そもそも色んな理由でコミュニケーションなんか出来ないし。

だからって短絡的に奪ったりすれば、一気に退治される魔物コースだ。辺境の村を苦しめる悪いモンスターとして、勇者様ご一行の経値とゴールドに化けることになるかもしれない。

ああ、なんかそう考えると、俺ってどう考えても踏み台なんだな。ちよつと凹む。

つっても現時点では村人を追い払ったりスレスレのグレーゾーンな

んだから大丈夫。・・・のはずだ。っていうかまだ大丈夫だよね？
昨日のアレで退治されたりしないよね？

元はあっちが俺の家を勝手にガサ入れしようとしてたんだから、非
は無いはず。

むしろ羊漢なんて拉致されそうになってたんだぞ！正当防衛だ！犯
罪者に人権なんぞ無えって昔の人も言ってたし！

自己弁護をしてどうにか落ち着くことが出来た。

とりあえず、俺に出来るのは襲ってくるかもしれない外敵に怯える
よりは、自分の生活を豊かにすることだ。

今のところ羊漢はミルクが出ることが判っているし、鳥達つがいは番でと
らえているので、卵が期待できるだろう。

・・・って、あ！鳥達の小屋を作るのを忘れてた！

昨日は精神的ショックで放牧したまま寝ちゃったから、一晩中外で
いたし・・・、ごめんよおお！

自分の所業に感極まって謝罪をしようと近づこうとするが、鳥達や羊漢は示し合わせたように逃げていく。

心なしか、こっちを見る視線がキツい気がする。・・・あ、羊漢が唾をペツて感じで吐き出した。「ようやく気がついたか愚図ぐずがつ！」
って意味でしょうか？

なんか嫌われ方が半端無い気がすんだけど、前世から引き継いでる動物に嫌われるスキルだよね？その影響だよね？俺の存在が気に入らないわけじゃ、ないんだよね？

そう思ったが、コミュニケーションがとれないので確認が出来ない。

むしろ話が出来たとしても、怖くて聞けない。

・・・今日は、鶏舎と羊漢の小屋を作ろうか・・・。いえ、作らせていただきます・・・。

☆13日目

どうにか昨日完成した鶏舎と羊小屋は、我ながら中々の出来だと思う。

通気性は良く、雨漏りもせず、なおかつ外敵をシャットアウトとか、
匠の技なんじゃね？^{たくみ}

おかげで羊漢や鳥達も多少は機嫌が良くなったし。・・・相変わら
ず俺が近付くと逃げられるけどさ。

一人じゃないのに一人ぼっちって不思議だね〜。

・・・全然笑えねえ。

とりあえず、今日は他のことをしてみよう。

具体的には、しようしよう詐欺一步手前の魔法の練習とか。

今のところ使えるのが判ってる魔法は、今も使ってる日よけと火と
作物の生長、あと、謎の発光現象。

この世界の魔法に系統とかがあるかは知らんが、見事によく判らん
ラインナップだな〜。

『日よけ』は一回使ったら未だに効果が残ってるし『火』は威力が

阿呆みたいに高い分調整が難しいし、『作物の生長』は色々と条件がないと並の植物くらいまでしか成長しないのは判ってるんだけど。

・・・謎の発光現象がなあ。

木から落ちてたとき、偶然使えたけど、なんだったんだろ、アレ？

ワープ？・・・でも、なんか時間がやたらと過ぎてたしなあ。ほぼ丸一日くらい。

意味判んね。まさかキングクリムゾン？いや、ナイナイ。

自分まで能力が効いてたら意味無いし。そもそもスタンドじゃないし。

うーん。ま、今はいっか。どうでも。

その4つ以外にはなんか使える魔法はないか、試してみよう。

・・・そしてしばらく経って。

無理でした。3時間かけても無理ってどういうこと？

うんうん唸ってるだけでこんなに時間が過ぎてるなんて、これなんてキングクリムゾン？

『矢』に刺されたわけでもないのに！

・・・冗談はともかく、全く進展が無い。

もつと色々魔法を使ってみたいんだけどな。

だからって謎の発光現象のときみたいに一か八かの状況に自分を追い込みたくないし。正直、自分が一番大切なもの！

とりあえず、もう一回試してみよう。まずはさっきまでやってた念動力から。

目の前に置かれたりんごもどき。

それを見ながら、『浮け』と念じる。念じる。念じる。念じる。念じる。・・・変化無し。

ぴくりとも浮かないし。段々とムカついてきたので、じっとりんごもどきを睨む・・・が、やっぱり変化は無い。

もしかして、野生モンスターだから覚えられる特技が少ないのか？

うーん、魔法は使いたいけど他のヒトと一緒に冒険をしないと駄目なら、諦めたほうがいいのか・・・？

そう考えながら、悩んでいると、突然俺の身体が光り始めた。

唐突すぎだろ！相変わらず！

慌てるが、光は収まらないどころか余計に強くなる。あわわわわわわわ。

あ、羊漢、鳥たちも。どうしてそんな柵の真逆の方に走っていくの？俺、ピンチかもよ？主に精神的な理由で。メンタル

自分が一番大事なところは清々しいほど俺に似ている畜生どもの姿にがつくりと落ち込み、視線の先にりんごもどきが戻ると、光は徐々に俺の目（多分）の位置に収束。

一瞬の後、そこから極太の光が放たれる！！

意味判らねええええええええええ！！！！

なんで目ビームなんだよ！口から怪光線の次くらいにネタ臭がブンするぞ！？

しかも光が収まった後の光景……。さぞや大きな破壊の痕がある、と思いきや何も変化は無い。

あの演出で破壊力ゼロってどういことだよおお！

テッテテ♪触手Aは見た目だけビーム（仮）を習得した！

なんか脳内に嫌なテロップまで出てくるし！しかもAって他にもいるのかよ！

・・・落ち着け、落ち着け。B E C O O L。俺は出来る子。今までは充電してただけ。本気出してなかっただけ。余裕を持つんだ。心は紳士で身体は触手。それが俺じゃないか。

自己暗示をかけることでどうにか持ち直す。

・・・ふう。使えない魔法があったとしても、それはそれでいいかあ。

多少は残念だが、俺が生活するうえでは、別にマイナスにはならないし。まあプラスにもならないんだけど。

そう考えてりんごもどきを持ち上げようとする、違和感に気付いた。

・・・あれ？重いぞ？

別に持ち上げられないわけじゃないんだけど、さっきよりは明らかに重くなってる・・・？

不思議に思っ、よく自分の触手が持っているものを見てみると、りんごもどきが変色している。

青みが強い紫だった色が、茶色がかった灰色になっていた。

なんだこりゃ？

果物程度なら簡単に碎けるだけの力をこめても、びくともしない。

硬いし、重い。見た目だけは果物のままだが、まるで石だな。

うーん、もしかしくなくても、これがさっきの目ビームの効果？

・・・あれか？石化？とか？

ええー？マジでえー？石化魔法って、金の針で回復できる劣化版即死魔法だろ？

なんでそんな危ないやつを俺が使えるの？

いや、見た目だけビーム（笑）よりはいいんだけどさ。

俺じゃ、使い道が無いんじゃないかな。人間相手に使ったりするのなんて無理だし。無理無理。絶対無理。怖いし。使うくらいなら、逃げるし。

一瞬、リアルに自分がこの魔法を使う瞬間を考えて、怖くなってき

た。シリアスに路線変更とか、無理だからね、俺！

ガラスの精神は伊達じゃないッ！
メンタル

・・・とりあえず、この魔法については平和的な使い道を模索する方向で前向きに検討していきたいと考えております。（政治家答弁）

☆14日目

また青い流星が流れてた。しかも、やっぱり昼間に。

どうでもいいけど、こんなに流れ星が多いとありがたみが無えな。もしかしたら、この世界じゃ願い事をする風習なんかは無いかも。あれ？てか、あれって日本だけの風習だっけ・・・？

ま、いつか。

とりあえず、今日は山菜を捜してみよう。果物以外にも野菜があれば、栄養が偏る心配も無いし。

・・・野生動物っぽく、肉を生で食べればビタミンが摂取できていんだらうけど、ハッキリ無理だしねえ。血とか出るだらうし。そ

もそもこの身体にビタミンが必要なのか判らんけど。

鶏舎と羊小屋から柵の中に放牧すると、山に向かって出発する。

本当は洞窟からあんまり遠出したくないけど、近くの森は粗方探し終わってるからなあ。

しばらく山を登ると、背の低い木がまばらに生えた草原があった。このあたりで採取してみようか。

さて、ここで問題です。

？元から知識はほとんど無い上に、植生の違う世界なのでどんな植物が食べれるか判らない。

？人間が大丈夫でも、自分はどんなものが毒になるのか判らない。
？情報ソースは皆無。

以上の条件を満たしつつ、山菜を採取できる方法とは为什么呢しょうか。

・・・答えは、”自分が直接食べて確かめる”でしたー。

俺の目には神農さんみたいにレントゲン機能は無いから、腹痛で調べていくしかないのが嫌なところだけ。今更、古代中国の人よりもアナログな方法を使うことになるとは予想してなかったよ。

ともかく、目についた草を少しずつ触手の先から食べていく。リスクは大きいけど、これで食べられるものを見つければ、あとは俺の魔法で量産できるから、心配は無い。

とはいえ。

うげ、渋い。

次は青臭い。

臭いがきつい。

味がしないけど、食べた触手が凄まじく痒い。

痺れる・・・ってこれ毒だよ。多分。

えーと次は・・・あれ？あれれ？いつの間にか、お花畑が。あはははははは。綺麗だなく。蝶々さんもたくさんとんでるし。

なんだか。それが凄く違和感があるんだが・・・。何故だろう？

・・・不思議なこともあるもんだ。

とりあえず、今のところ試した草は全部駄目だ。

葉っぱの形とか色を覚えてから、全て捨てておく。

最後に試した葉っぱだけは理由が判らないが、無性に捨てることに抵抗があった。しかしいらないものをいつまでも持っておくのも面倒なだけなのでやっぱり捨てておく。

そうしてまた草を採取して、地道に食べる。

結局そこから4時間くらいかけて、見つかった山菜は5種類。因みに毒草は6種、さらにもう一回意識を失ったことを追記しておく。
・・・本当に何があったんだろ？

山菜の内訳は、ニラっぽい草。臭いも味もほとんど同じ。

アロエみたいな草。苦味はほとんど無い。ただし汁がつくと痒い。

山芋的な何か。独特の風味があるが、不味くはない。むしろ美味しい。これも汁がつくと痒い。

白菜とキャベツの中間っぽい植物。レタスに似た苦味はあるが、食べれないわけじゃない。

キュウリに似た蔓植物の実。中身は黄色で、味はむしろ南瓜カボチャっぽい。

以上の5種の山菜をそれぞれいくつか持ち、洞窟に帰る頃には日も傾き始めていた。やっぱり二回も意識を失ったのが拙かったか。

てか、マジで何があったんだ？

うーん、よく判らん。

記憶が無いっていうよりは、それを思い出さないように自分で鍵をかけてる感じ。

いつの間にそんな器用なことが出来るようになったんだろ？

ま、
いっ
か。
さて。
明日は畑を作っていくことにしよう。

4話 ダンジョンつくってます

☆15日目

見る見るうちに増えていく山菜を見ていると、魔法の反則さがよく判るな。

なにせ、俺がすることは土地がやせたウネに肥料を混ぜた後、山菜の種を植えて水をかけるだけだ。

あとはなんか俺の身体から染み出す緑色っぽい光が勝手にキモい速度で生長させてくれる。その繰り返しで俺の周囲にはすぐに山菜が出来る。開始半時間も経ってないんだが。

食糧危機？なにそれってな具合。

出来上がった山菜は自分が食べる分と種用を残し、残りは刻んで羊漢と鳥達用の餌に。

相変わらずコイツらは俺が近寄ると逃げていくが、餌の入ったバケツには突撃してくる。

ほぼ一日中草とか虫を食ってるのに、そこまで腹が減ってるのかね

〜？

考えていると、ふと洞窟が目に入った。

そういや、一旦中を拡張してからは全くいじってなかったが、また施設を大きくしてみようか。

既に俺が暮らす分には充分過ぎるくらいの広さにはなっているから単純に暇つぶしのためだ。

暇なものは暇だからしょうがない！！

とある理由があつて断念をしていたが、それを解消できる目処もたったことだし。

それに、毎日適度に身体を動かすのは健康に繋がる。前世でも、ひとりでジョギングやら筋トレやらしてたっけ。友達いなかったし。まあその辺は今も変わらないんだけど。

・・・考えないようにしよう。それが誰にとっても幸せな選択だ。

洞窟の中に移動すると、少し入ってから数日前活躍したつきりだっ

たドリル触手を持ち上げる。

一発ネタ？

え、何のことですか？伏線ですよ、ちゃんとした。（しれっ）

まずは、すでに掘った場所の成型から。そう考えて、ドリルを回し始める。

ギューイイイイイイイイイイイインツツ！！！！

相変わらずロボの腕についてないのが残念になってくるくらいの回転数だ。

ドリルはガリガリと音をたてて丸かった穴を、四角い通路に成型していった。だいたいのは大きさは2，5 m×3 mくらいか。丁度、俺が触手を縮めなくても楽に行き来できる大きさだ。

1時間くらいで通路と小部屋の成型を終えると、次は別の魔法の出版だ。

そう、石化ビームの。

2日前に覚えたこの魔法（多分）の使い方をしばらく考えてたんだが、ふと、今朝どこからともなく電波がやってきて『別に戦いだけじゃなくて生活に使えばいいんじゃない？』とコロンプスの卵的な発想をすることができたのさ！

ありがとう、電波！すごいぞ、電波！

ただ、あんまり頼りすぎると窓に鉄格子のある病院に入院することになりそうだから、それ以降は受信しないようにしたよ。

レオ様みたいにテロとか殺人とかマジ勘弁だし。

気をとりなおし、四角い通路を順次目ビームで照らしていくと、なんてことでしょう！

あんなにでこぼことしていた丸い通路が、コンクリを使ったかのような石造りの美しい通路に。匠渾身の作品です。

ふむ。これで崩落の心配は無えだろ。目ビームで作った石は俺が全力で締め上げても中々壊れないし。

そうして粗方石でコーティングすると、次は装備 触手↓つるはしをして、新しい通路を作り始める。

元々が一本道だったから、色々と複雑な構造にしてみよう。下手すりゃ、ここに籠城することになるかもしれないんだし。

備えあれば憂い無し。例え勇者がくることになったとしても、準備さえしっかりとしておけば、恐るるに足らず！

くくく。

ボスが何処にいるか判らない上、異常に複雑なダンジョンなんて誰も攻略できまい！宝箱も設置しないしな！

電波は俺に柔軟な発想をもたらしてくれた……。そう！戦うのが嫌なら、戦わないまま有耶無耶うやむやにしちまえばいいんだ！

旨味の一切無い、本当の意味での迷宮ダンジョン……。

俺なら、まず放置するね。っていうか、相手しないよね？普通。

そうしてザクザクと掘り進めて行くと、また例の岩が出てきた。

表面には、やっぱり鉱石が埋まってるし。そういや何なんだろう、これ？

前に掘った岩は、面倒くせえから今も小部屋の中に放ったらかしにしてるけど。

うーん。そういや、この洞窟って元々誰かが掘ってた跡だったけ？もしかしたら、この岩を採るための鉱山だったのかなあ。

……あるえ？

それって拙くね？いや、待て。マテマテ。今の俺の客観的な情報を考えてみる。主に人間とか、人間とか、人間とかから見た俺の像を。

？元々近所の村の住民が掘ってた坑道に棲みついたモンスター。うん、これは間違いない。ってーか、否定のしようが無い。

？見た目的に明らかに人類っていうか女の敵っぽい。……うん。これも、仕方無い。ホイミンの一種ですって言うには俺の触手はエグ過ぎる。同じ『ゲーム』でもこっちは「ひぎい」とか「らめえ」が標準装備の18歳未満お断りのアレだし。

？何度か人間が近寄ったが、その度に威嚇してくるから少なくとも、友好的ではない。……。うん。これも、見かたによっては、仕方無い……。かも。だって知らない人って怖いんだから、しょうが無いだろ！？

？巨大な木を育てたり、家畜を飼ったりと段々とその縄張りを広げてる。……。見えないことは無い……。か？家畜はともかく、樹は付近の名物レベルだからなあ。

以上から導き出される答え↓今のところ大丈夫だが、将来的に侵攻してくる可能性を考えると村のためにはいてもらっては困る、つまり居ないほうが良いモンスターということ。

そして、危険なモンスターだと判断されたら、村人か、それに雇われた一行が退治しにきたりするのが普通……。だよな？

———洞窟の奥で、なんか玉座に座って一行を待ち受ける俺。

———ホイホイと洞窟に入ってきた殺る気満々のご一行。明らかに勝てないし、武器にビビッてヘタレる俺。

———当然命乞いのコンボに「世界の半分をやろう」……

って俺人間の言葉喋れねえや。そもそも世界征服なんてしてねえし。

――――命乞いを失敗した俺に、振り下ろされる伝説っぽい
 剣。躊躇ゼロの攻撃魔法。

——そして俺は勇者の踏み台へ……。

おいしいおいしいッ！！？死亡フラグいつの間に立つ
 てるしいしい！！！！

絶望した！自分の立ち位置に絶望した！

俺に、正義せいぎのための犠牲になれと！せめて性戯せいぎの方が良かったッ！

それなら、まだ納得できたのに！触手だから！自分の存在意義に關することだからッ！

クソ！負けん、俺は負けんぞ！

ただ死ぬだけだったらビビるだけだっただろうけど、誰かの踏み台とかは拒否するッ！

アッガイやドムなんてお断りだッ！

・・・だからって戦うのはカンベンだけだな！

だからせめて、複雑すぎるくらい複雑なダンジョンを作って、諦めさせてやるわあああああああッ！！！！

☆16日目

昨日、日が暮れてからどうにか正気に戻ったが、気がついたら全5階層のダンジョンが完成してるってどういうことだろう。

とりあえず、ドリルで整地してから目ビームでコーティングしておいたが・・・。

そういえば、また小屋に連れて行くのが遅くなったせいか、今度は羊漢に蹴られるわ鳥共につつかれるわと、容赦無い折檻をされた。

俺のメンタルを慮おもつたりとかは全く無い、素晴らしい攻撃でございました。普段は餌を奪い合う仲なのに、なんでそんなとこだけ協力しあうんだろ。

だが・・・、知ってるぞ？その行動が、本心の裏返しだってことくらいは。

『忘れられたかと思っちゃったじゃない！ちゃんとお世話してよね！』って言いたいんだろう。本当は。

・・・フツ。ツンデレか。そう考えると、不思議と可愛く見えてくるものだ。

しかし、羊一頭と鳥15羽にいきなりツンデレされるとは、もしかしてモテ期だろうか。触手のモテ期サクセスストーリーって陵辱物語以外に知らなかったから、新鮮だ。

よしよし。俺はデレるまで気長に待つタイプだから。

じつとりと生暖かい視線を向けると、鳥達も羊漢も視線を合わせないまますぐに俺から離れていく。

・・・ツンデレだよな？

若干不安になってきたが、応えてくれる者はいない。

気を取りなおして、ダンジョンの拡張を再開する。

そういえば、昨日掘った場所だけでも、数十個の岩が出てきたが、あれって結局何なんだろう？

宝石？・・・にしては、俺が住み着いてからものんびりしてんだよな。価値が高いものなら、すぐに排除されてただろうし。

つってもここが鉱山だってことは、多少は価値があるものなんかねえ？

ま、いっか。考えるの面倒くさい。

とりあえず、1つの部屋じゃ入りきらなくなってきたから、別の部屋に押し込んでおく。

また暇を見つけて研磨しておこう。

しいて言うなら毎日が日曜日だけどね！今も昔も！

前世では、よくNETと呼ばれてました！

違うモン。引きこもりとニートは同じわけじゃないモン。でも俺は両方に該当してたよな？

まあいいさ。俺が本気を出すほどの場に恵まれなかったただけだ。・・・と思えたらどれだけ幸福なんだろう。

若干鬱が入りながら、つるはしを持つと、俺は洞窟の地下に潜る。

地下四階までくると、つるはしをふるって土を掘り始めた。昨日は気にしてるほどの余裕が無かったけど、やっぱり簡単に掘れる。

ゴリゴリと掘ってしばらく進んだら、ドリルで整地してから目ビームで固める。その繰り返し。たまに例の岩が出てくる。

そーいやRPGとかのダンジョンってやっぱ俺みたいな低級モンスターが酷使されて作ってたのかな？

こう、魔法でババツと出来たりとか・・・、無いみたいだな。

無意識の欲求だったはずだけど、今回はいつも唐突に出てくる魔法の光は沈黙してる。どうやら、ダンジョンを作る魔法は無いみたいだ。

残念。簡単に終わるかとおもったのに。

俺の嫌いな言葉は『努力』と『頑張る』だが、こればかりは手を抜くわけにはいかない。他でもない自分の命がかかってるから。

地道にやってくしかないだろう。

退治されないうちに。

昼を過ぎる頃には、どうにか8階層まで完成した。鉱石はもう数えるのも面倒くさいくらい出てきている。

どうも深い場所ほど出てきやすいみたいだ。使い道が無いからどうでもいいんだけど。

洞窟から出て、料理の準備を開始。

目ビームで作ったかまどに火をおこし、同じく粘土を石化させて造

った鍋を置く。

とりあえず水と灰汁ヌキした山菜を色々、隠し味に羊漢のミルクを少し加える。・・・どうでもいいけど今、→の表記を途中で切って”漢のミルク”って読むと色々と気分の悪くなる映像が浮かぶのは気のせいだろうか。

名前のつけ方を間違えたかも。

・・・とりあえず深く考えないようにしよう。触手だからってソッチ系までジャンル制覇する必要は無い・・・と思いたい。つーか、ソッチで触手の受容があるのか判らんし判りたくもないけど。ネタとして楽しむ分には構わないが、さすがに実演はしたくないんです。

マジで。マジで。

アッ————！！

いつの間にか料理が完成してたのでお玉ですくってみる。多少、冷ましてから触手の先から呑むと悪くは無い。

っていうか結構美味い。

料理とか作るの初めてだったけど、案外出来るモンだな。

モリモリと食べる俺の横で羊漢や鳥達も食事をしている。

なんだかのどかな風景だ。

最近、本当に余裕が無かったからなあ・・・。

そう考えると少し泣けてきた。

さて、ご飯を食べたし、少し寝ておこう。起きたらまたダンジョン建設。十階層もあれば、充分でしょ。

5話 触手のなにがわるいんだ

☆17日目

今朝気がついたんだけど、鳥たちが卵を産んでたみたいだ。

放牧するために小屋の扉を開けたんだけど、一向に出てこない奴がいたから調べてみたら、中に敷いた枯れ草の中で卵を温めてた。

確認しただけでも、五つもあった。早速卵かけご飯・・・は無理だから、ゆで卵にしようと思ったんだが、子供を必死で守ろうとする親鳥の眼光と、あと主に俺の血で汚れた嘴くちばしが原因で断念することに。

だって前からは母鳥、後ろからは間男を見つけたような勢いで父鳥の嘴が炸裂するんだぞ？

全身から緑色の血を流しながら退散する以外に俺にどうしろと。

しかし、ただ負けて逃げるだけじゃ俺のプライドに傷がつく。もともとあるか無いかもよく判らないものだけど。捨て台詞くらいはしてやろう。

—————フン。今回は見逃してやる。だが、覚えておくがい

い！光があるところには必ず闇があるものだ……。次は、次こそは必ずやゆで卵を……。あ、痛い。痛いって。マジ痛いから。突っつくなよ。もう小屋から出てるじゃん。あ、イヤ、ちよっ、ごめんなさい。本当、ちよっと調子に乗ってたっていうか……。

再び全身から緑色の血を流す俺。鳥たちの容赦無い追撃は俺が柵から出て行くまで続けられた。

因みに全身の痛みが引くまで数分かった。いつぞやの熊の咬み傷が数秒で治ったことを考えると、その威力の高さが判る。

俺の戦略的撤退はベストな選択だったと言えるだろう。むしろあんな危険な場所に身一つで入っていった自分の勇気を褒めてやりたい。

それに親から子供を取り上げるのも可哀想だからな。今回は見送って数を増やすことから始めよう。……。別に、嘴が怖くて諦めたわけじゃないんだからなッ！

自己欺瞞ごうきまんは完了。

うん。やっぱり妥当な判断だ。

誰にとも無く言うが、当然返事は無い。

さて、気を取り直して今日は魔法の練習でもしよう。ダンジョンは昨日で一応の完成はしたし。

———上下10階層の、洞窟型ダンジョン。

内部に敵モンスターはいないが、構造が異常に入り組んでおり、ひたすら複雑で広大。宝箱等は一切無く徒労感だけが溜まるし、見取り図か、実際に掘った俺みたいに感覚で構造を覚えてないと、まず確実に迷う。

しかも、俺は最下層の大広間の天井裏に隠れてる。空が飛べるか、俺みたいに物理的に天井に空いた穴に届かない限り、入りようが無い。いや、それ以前に天井の穴に気付かない限り、見つかることも無いだろう。俺が隠れ次第、その穴の蓋も閉めるし。

そうして秘密の抜け穴から逃げ出した後は、洞窟の通風孔の前で生木に着火。勇者たちは内部に流れてくる煙の勢いに慌てて洞窟から逃げてくる・・・って寸法よ！

多少煙けむいかもしれんが、不法侵入者にそれだけで許す俺の寛容さに感謝するんだな！

・・・ふははははは！我ながらなんて完璧なプラン！

え？正々堂々と戦わないのかって？

勝てばいいんだ何使おうが勝ち残りゃあ！！世紀末兄弟の三男もそう言ってるし！

実際、死んでまで守りたいポリシーもないしな。

出来るとは思わないけど、殺すのも俺の精神衛生上、NOだし。

それに人間、生きててナンボでしょ。あ、お前触手だろっていう突っ込みはナシの方向で。

そろそろ今日も魔法の練習をしてみるかね。

☆18日目

珍しく、というのもアレだが、昨日の魔法の練習は全く進展が無かった。

成長現界に達したのかと思っただ、転生して一月と経たないうちに成長が止まるってどんだけ速成栽培なんだよ。

やり方が間違ってただけだと思いたい。

でないこれから先、何回命が危なくなるのかも判らないのに、基本、戦闘に使える魔法がkill or dieだけのヤバいのオンリーになる。

出来ることならそれは避けたい。ガチで誰かとやりあうことになっても勝てないだろうし。

俺の基本はアウェー&アウェー。ともかく逃げて逃げて、相手が呆れるか諦めるくらい逃げ続ければ、怖い思いをする必要もないのさ！

下手に攻撃^{ヒット}なんて考えてたら相手から痛い目に合わされるだけだしな！

とはいえ、現状逃げたり防御したりするのに適した魔法は覚えて無いから、どうにか習得したいもんだ。

そのための魔法の練習なんだが・・・、やっぱり今日も進展が無い。今までの経験上俺が強く何かを思うと、それに応じた魔法が出るみ

たいなんだが、さっぱり何も出てこない。

目ビームのときみたいにな、触手を的にしたりんごもどきに向けてるが、一向に何も出てこない。

たしかに何かが出そうな雰囲気はあるんだけど・・・。

うーん、強く考えても、『なんか出て来い！』じゃ具体性に欠けるのかな？

イメージ、そうイメージすることが必要だ。ただ闇雲に命令するだけじゃ意味が無い。最強の自分を常にイメージしろ。赤い男前もそう言ってる。

出す？・・・出すためには何をする必要がある？魔法が出てこないっていうなら。

引っ張る・・・じゃない。

もぎ取る・・・でもない。

押し出す・・・・・・・・、これだ！

連想するイメージはところでん。あるものを後ろから押し出して形にする幻想。

出る、出る、出す、出れば、出るとき・・・！

そして俺の身体からは毎回唐突に出てくるあの光が・・・・・・・・・・
・あれ？

出てこないよ？いや、今一瞬だけ出たような気がしたんだけど、いままでみたいに長続きせずに、すぐに消えたみたい。

・・・ところでんが拙かったのか？やっぱ定番のかめはめ波の方がよかったのか？

そう考えてると、触手の様子が少しおかしいことに気付く。

なんていうか・・・、俺の触手は普段から粘液に覆われてて、ズルズルとしてるんだけど、それが10割→15割増したたしされたっていうか、もはや液を滴したたらせるレベルだな、これ。

もしかして・・・と思って垂れている液を木に擦なすり付けるが、変化

はなし。

・・・エイリアン先輩みたく強酸性ってことはなさそうだ。

まあ、そうなるに逆に不便だったから良かったかもしれないけど・・・
・・・、ってちょっと待て。

ということは、まさかこの魔法？の効果は粘液の分泌を良くするだけ？

・・・え、マジで？

はああああああッッ！！？

何の意味があるんだよ、それッ！？

効果は触手の見た目のキモさとズルズル感を向上させるだけ！

もしくは滑りをよくするんだろうけど、ドコでナニをするためなんだよ！？

さらに外見がもはやモザイクが必要な有様になってきてる。お茶の間に流したら確実に放送事故レベルだよ、これ。

助けを求めて羊漢たちを見るが、そろってこちらに尻をむけている。

ならばと正面に移動すると、今度は全員が他の方向に向きなあった。

……ツンデレなんだよな？信じていいんだよな？

最近段々自分で自分を騙してるような気がしてきてるけど、気のせいなんだよな！？

聞きたいけど、聞けない。俺は最後の最後には必ず安全牌を選ぶタイプだから。

世間ではヘタレと呼ばれるタイプですね、わかります。

今日はもう休みたい。全身〇ーションまみれだし。

☆19日目

目が覚めると、○ーションまみれだった。

いや、魔法の効果が切れてないだけか。しかし、自分の身体ながら、気持ち悪い。

最低の目覚めだ。前世で寝ゲロしたときよりも精神的のくるものがある。

保温性なんかは高いみたいだけど液体でありながら、水とは違った粘性があるというか。

とりあえず身体の表面についている感触はあまり良いとはいわずら。物を掴むときも、滑るから不便だし。

洗い流すために行水しようかとも思ったが、なんか川の水がやけに冷たいんだよな。

時期的なものか、場所的のものかは知らんけど。

風呂があればいいんだけど、無いしなゝ・・・・・・・・って、自分で造ればいいじゃん。

とりあえず今日は風呂を造ろう。

一番簡単なのは、やっぱり五右衛門風呂だろうか。土をいじって木で底蓋を作ればいいだけだしな。

そう考えて、まずは土の山を作り始める。直径1, 5 m、高さ1, 5 mくらいか。あんまり大きいと、燃やす薪が多くなるからね。

そうして山が完成したら、目ビームで軽くまわりを石化。それを裏返せば、俺が入ることが出来るくらい大きな鍋が完成だ。形は円柱に近い。あとは、その下に専用のかまどを作ると、やっぱり目ビームで壊れないようにコーティングする。

底蓋はその辺の木を倒して削り取ってきた。ドリル触手まで〇ーシヨンのせいで滑りそうになっていたのには参ったが。

風呂が完成すると、今度は水を入れてかまどに火をつける。

あらかじめ乾燥させてあったお陰か、いつかのキャンプファイアーみたいに煙が出過ぎることも無い。

しばらくして、中身がお湯になってきたら、風呂の縁^{へり}を持ちながら、中に入る。少し熱い気もしたが、中々気持ちがいい。〇ーシヨンも

来た。来たよ。人間が来た。っていうか、待ち伏せされてた！

なんだよ、この超展開！？

いや、フラグは立ってたんだけどさ！

シリアスは無理だって言ったじゃん、俺！

どうする？ どうしたらいい？ 追っ払うにしても、数が多い。むしろ逃げたいけどそれも出来ない。

10人で。なんでこんな弱小触手を相手に、そんな数をそろえてくるの！？ 前は4人だったのに！

それに、普通、パーティーは3〜4人だろ、常識的に考^Jえて！ 残り^Kは馬車の中とかで待ってろよッ！

しかも、それぞれ弓矢とか短剣を持ってる。

ヤバイヤバイヤバイ。殺る気は満々だッ！

ダンジョンを使おうにも、今俺は果物を拾いに来てるから、無理だ。

逃げようにも囲まれてるし！

うわ。どうしよ、どうしよ、本当にどうしよ。汗まで出てきたよ。

触手が余計にズルズルになってきたし。また風呂に入らないと。

待て。テンパるな！考えろ。考えろ、マクガイバー！見たことないけど！

これは問題だ！この囲まれた状況から、どうやって逃げ出す？

3択—— 一つだけ選びなさい。

答え？（ある意味）ハンサムの触手Aは突如逃走のアイデアがひらめく。

答え？やっぱりツンデレだった羊漢や鳥達が来て助けてくれる。

答え？逃げられない。現実是非情である。

俺が○をつけたいののは答え？だが期待は出来ない……。悲しくなってくるけど。涙とか出そうだけど。

しかも・・・、ああ。本当にアイディアが浮かばないし。

ここまでくるとテンパるのを通り越して若干冷静にすらなってきたよ。

うーん、俺がいる木を中心にして、10人が円を描くように配置されてる。

でも、全員が弓で俺を狙ってるってアリなのか？

外れたりしたら、仲間当たったりとかしないのかね？

ん？

あれ？よく見ると、こいつら、耳長くね？

いや、ファンタジー物のエルフほどじゃないんだけど、人間の耳を3cmくらい上に伸ばした感じっていうか。

まあ、それに気付いたからって現状、何の意味も無いんだけどね！

でも、どんな魔法を？失敗したら、まず死ぬぞ、俺！

「————放てッ！」

リーダーの二度目の号令。そして放たれる矢。

ちよ、ま、せめて辞世の句くらい考えさせろよッ！

思わず目を閉じる。

今度生まれ変わったら、自転車のサドルになりたい……、
あ、男用だったら地獄だな、それ。

えーと、えーと、それじゃ、ブラとか。でも男用はカンベンな！

……ん？

なんか痛くないんだけど。

「馬、馬鹿な……！矢が効かないだとッ！」

リーダーがなんか焦ってる声。あれ、まだ俺生きてんの？

目を開けると、正面でリーダーの人がなんか驚いた顔をしてる。

その視線をたどると、自分の足元に落ちてる数本の矢が目に入った。

どれも鏃^{やじり}には血がついてないから、身体の表面で止まったのか？

でもなんで？首を傾げるが、よく判らん。

そもそも見てた方もよく判らんみたいだし。

「————クソッ！総員、退避ッッ！」

リーダーさんが怒りに顔を歪ませたまま、号令を下す。

周囲の奴らは何かブツブツと言ってたが、そのままそれぞれの方
向に走っていった。

追っかけられても被害を最小限にする知恵かね。別に追っかけな

いけどき。怖いし。

・・・っていうか、怖かった～～～！

うわ、俺死にかけたよ！

マジでまた死んだかと思ったッ！

へたり込みそう。うわ～～～、本当、助かったんだよね？

良かった。本当、生きてて良かった！

今日は・・・、今日はもう帰って寝よう。本当、疲れた。マジ死ぬかと思ったし。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4130x/>

触手モノ

2011年10月20日20時36分発行